

令和元年9月1日発行 春燈/第74巻第9号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

# 春燈

2019 September

9  
月号



主宰の句

安立公彦

朴の花仰ぐどの子も未来見て

朝の日に零す余滴や合歡の花

林間学校大き夕日に手振る子ら

一兵卒たりし師偲ぶてんたう虫

梔子の花はや褪する文のごと





安住敦の句

ある日ひとり萩括ることしてをりぬ

『歴日抄』昭和四十年

敦は萩、芙蓉、牡丹、樗など特定の花に集中して句を作っている。掲句は、昭和三十八年五月六日に万太郎が急逝し、百ヶ日も過ぎた頃の作品。流れるようなリズムに短歌的な抒情を感じるだけでなく、まるで随筆の中の一文を見ているような調べがある。万太郎への思慕と共に、「春燈」を継承した逃れ難い歳月の流れにいる自身の心の揺らぎを詠んでいるのだろうか。

小山 繁子



安住敦の句

# 麦秋や書架にあまりし文庫本

『古曆』昭和二十九年

安住先生の書齋には、文庫本といわず沢山の本が保管されていたであろうことが想像される。

かつて我家にも、文庫本が小さい本棚を占めていた。

つい先日散歩の折久しぶりに、ほんとうの麦を見る機会があり、黄金の波が光るさまにまさしく麦の秋だと実感させられた。これからも先生の御句を勉強し、日々精進し細く長く進んでゆきたいと思えます。

石橋 邦子

# 燈下集



○ 太田佳代子

手のなかに未来だけあり天瓜粉  
噴水や岐路と知らずに通り過ぐ  
一抹の憂さ雨に溶く濃あぢさゐ  
雲梯にぶらさがる子ら虹叫ぶ  
もう一度噴水として吹き上がる

○ 久保久子

卵の花や母の忌日の夕明り  
牛蛙ゆつくり動く沼の風  
えご散るや父の匂ひの農具小屋  
ひと工夫かせる老後青山楓  
斑猫や生涯恋ふる人ひとり

○ 廖 運 藩

能管の一声五月闇を裂く  
待つといふ刻の長さや梅雨の駅  
三味線の音色も鈍き梅雨湿り  
ひとり居の我が家が気楽青簾  
半夏生老いはひそかにやつて来る

堂守涼し世襲五代目台湾杉(タイワンシヤ)伝来の庶民服  
冷房下手廻しミシン台湾衫  
夏瘦せて夫婦デュエットの金切声  
夏瘦せて張三季四のへぼ象棋  
香水の餘香懐しき別れかな

○ 久米 憲手

せせらぎの梅雨入の音となりしかな

抜け道の昔花街やえごの花

白玉や上野浅草根津谷中

蹲踞に遊ぶ日の斑や寺薄曇

夢二絵の風かぐはしき団扇かな

○ 小倉 陶女

梅雨籠り無沙汰の筆をとりにつけり

大学芋の蜜ねつとりと梅雨深し

ゆふづつや雨後の茅の輪の匂やかに

亡き猫の爪跡しるき籐寝椅子

土用干思ひ出たたみ直しけり

○ 荒井 慈

男梅雨弁天橋を渡りけり(今の島五句)

令和元年黒鯛魚拓生ビール

五頭籠の動き出したる白雨かな

ヨットハーバービュッフェの線のひしめけり

明治の黒きポスト細身や夏の蝶

○ 佐渡谷 秀一

桐咲くや工作小屋の槌の音

葉桜の下に集まるザックかな

籐椅子や芝生ころがる鳥の声

借景の山並隠す走り梅雨

ででむしや押さぬつもりの横車

○ 沼田 桂子

青梅のリカーの海に眠りををり

梅雨晴間ひかるものみな光りけり

十葉の咲きたいだけの白さかな

咲く時を心得てをり七変化

百年の時空を越えて麴黴

○ 宮田 豊子

長梅雨に湿る水指遠野焼

紐育の子よりのメール虹立てり

夕星や紹の衿に風遊びゐて

校舎跡片蔭に聞く童唄

介護施設に友を訪ふ日や文字摺草

○ 呂 秀 文

夏瘦にあらざ髪膚損なへり

ラムネ一本家宝の如く棚にあり

良き思ひ出のみとは至難新茶淹れ

長命の良し悪し談義冷房裏

炎天下猫一匹も来ぬ公園

○ 陳 妹 蓉

アルバムに青春の日や徹払ふ

すれ違ふ人それぞれの香水かな

夏やせを心頼みにダイエツト

夏やせてやや若やぎしと上機嫌

齢に合ふ柄多からず更衣

○ 井 上 正 子

太宰忌や別れを惜しむ管理人

親友が同じ教派へ額紫陽花

夫の父の晩年の世話花菖蒲

白薔薇や美人と言はるる孫娘

雷鳴の響きに負けて電話切る

○ 三 代 川 玲 子

雨音のつのりてきたる芒種かな

どくだみや己の白を待みとす

金文字の包丁塚や夏至の雨

傘とちて雨の茅の輪をくぐりけり

雨脚の明るくなりぬ行々子

○ 豊 谷 青 峰

梅雨鴉隔雲亭の昼灯 (明治神宮)

菖蒲田や祢宜の袴の濃紫

緑蔭の四阿抜くる風の色

さまざまな影をひきずり梅雨深む

まつさをな空に湧き出て夏の雲

○ 高 埜 良 子

夏暖簾駄菓子屋で売る恋みくじ (兼文句)

松風の静けき窓辺夏座敷

梅雨晴や回廊慈悲の説話の囀

ひと声を掛くる石榴の花の下

晩学の座右の銘や書を曝す

# 余言

安立公彦

徒に爪伸びやすく梅雨を病む

佐藤 信子

「徒に」が自然体で佳い。爪というもの、放っておくと何時の間にか伸びている。女性の場合はマニキュアという爪の手入れがあるので放っておく訳にはいかない。

この句、その伸び易い爪を、「徒に」と表現してある。それは下五の、「梅雨を病む」に結びつく言葉。折からの梅雨の最中、体調を崩した作者。或る日ふと指を見ると、爪が伸びている。この「爪伸びやすく」も適切な中七である。一句の表現に無理がなく、日常的確に述べてある。

散る薔薇の紅き花びら指先に

橘 正義

この句の前に、〈朝な夕な隣の薔薇を愛でにけり〉の句があるので、この薔薇は隣家の薔薇である。しかし一句を読んでいると、この句には、「薔薇」そのものの持つ花の命とも言ふべき「美」が感じられる。

この薔薇は、「散る薔薇」である。その一片が指先に止まっ

ている。それを作者は、「紅き花びら」と表現する。それがとりどりの薔薇の「美」を総括している。ここには薔薇と作者しか居ない。それを「指先に」という言葉で締めている。練達の句と言えよう。

汝もまた闇に夫恋ふ青葉木菟

高橋 和女

「青葉木菟」という鳥は珍しい鳥ではない。試みに手許の電子辞書に当たると、ぱっちりとした目玉と、ホウホウと鳴く声が印象深い。俳句の例句も多い。

この句、作者は先年夫君を亡くされた。「汝もまた」、「闇に夫恋ふ」には、作者の深い思いがある。上五の「また」がこの句を支えている。「青葉木菟」の季語は動かない。〈残されて一人静の鉢育て〉も哀しみを押さえた句。

トランクの中は昭和や夏きざす

三宅 文字

去る五月三十日、千葉支部柴又大会での作。葛飾柴又は周知の通り、帝釈天題経寺で知られた地である。中でも回廊に沿う彫刻の数々は、「彫刻の寺」の名の通りの絶景。隣接の山本亭の和風建築の美しさも遍く知られている。

加えて、平成九年に開館した「葛飾柴又寅さん記念館」も人気がある。映画「男はつらいよ」で、渥美清が演じた寅さんは、全ての人に愛された。トランクを掲げる寅さん

の姿は忘れられない。その寅さんを詠んだ、「トランクの中は昭和や」が、良く柴又の風土に溶け込んでいる句だ。

□遊ぶ牛飼のうた麦の秋

岩永はるみ

「伊藤左千夫」の前書がある。伊藤左千夫は千葉県の生んだ、現代短歌の祖とも言うべき歌人である。元治元年、千葉県山武郡に生まれた。掲出の「牛飼のうた」は、生家前に歌碑として建立されている。へ牛飼が歌よむときに世の中の新しき歌大いにおこるを指す。この牛飼は、左千夫二十四歳の時、現在の錦糸町駅前牛乳搾取業を開いたことに由来する。四十一歳のとき小説『野菊の墓』を発表。その記念碑が、今回の千葉支部大会のあった柴又から、江戸川を挟んだ松戸市下矢切の西蓮寺境内にあることは、良く知られている。訪れた人も多かった。

この句、「□遊ぶ牛飼のうた」に、左千夫短歌への思いが自ずと浮かんで来る。伊藤左千夫の短歌は牧歌的だ。

灯涼し加齢病とは言はぬ医師

田嶋 洋子

「加齢病」は現代の病の一方を為す。厚生労働省の統計が新聞に出ていたが、老衰で亡くなる人は、死因の三位を占めると言う。瘵、心疾患に次ぐとのこと。加齢病は老衰

の過程と新聞は記す。この医師は作者に、「加齢病とは言はぬ」態度をとり、作者の病状への思いにゆとりを示す。医師の思いやりだろう。「灯涼し」が安堵感を伴う。

頬杖の窓辺の吾に四十雀

清水 美子

絵に描いたような一句だ。「頬杖の窓辺の吾」が善い。景が自ずと浮かんで来るようだ。遠い昔、知らない町なかで、ふと眼を上げた視界に映っているような景である。或いは昭和の作家の小説の中に在るような思い、とも言えよう。「四十雀」との取合せも善い。四十雀は鳴き声も愛らしい。日本の林地の鳥の代表、と辞書は記す。この句はまた、涼やかな別荘地の景とも言えよう。

梅雨満月「卑弥呼」の講座昂り来

篠原 幸子

「卑弥呼」の登場に目を瞠る。この卑弥呼は作者が受講している「講座」のテーマ。辞書を開くと、卑弥呼は邪馬台国の女王として、「三国志」の魏志倭人伝に記されている魏と交通があり、その地は九州と畿内の両説とある。講座の有り様は分からないが、折からの梅雨満月の中、集う人たちの熱心な受講の様子が伝わって来る。作者は先般転居された。新しい住いの地の友人を誘っての会かも知れない。「昂り来」が適切だ。古代史にはロマンがある。

# 当月集

安立 公彦選



○ 中澤 弘

三味の音のさやかに響く梅雨晴間  
ぬれ縁の猫の身ぶるひ梅雨晴間  
隣人の詩吟伸びやか夾竹桃  
夏の雨小さき猫の雨やどり  
静まりくる路地の残照冷奴

○ 横山 さくら

枝豆や噂話の尽きぬ夜

見上ぐれば友の横顔原爆忌

冷酒酌む触れてはならぬ細き指

三伏や折鶴の角折り難し

白球を追うて追はれて玉の汗

○ 小林 紫乃

手付かずの段ボール箱梅雨に入る

斑猫の心惑はず方にゆく

雨上がり大瓶に咲く未草

桑の実や冒険ごつこに夢中な子

応援の女学生の声大南風

○ 近藤 真啓

朝もぎの一直線の胡瓜かな

雨の日の噴水高くあがりけり

夏至来るや葉草汁を夜の卓に

青々とみゆる果実や巴里祭

風鈴に山河の記憶ひとつ鳴る

○ 山浦 紀子

シスターの海芋抱くや朝のミサ

移し替ふる目高の稚魚の命透く

老犬と頬寄せ合ふや梅雨の月

留守電の点滅著き梅雨滂沱

髪を結ふ子の襟足の汗ばめる

# 春燈の句

安立 公彦選

万緑やこのもかのもへ試歩の妻

東京 小林 文良

空梅雨の月しらじらと上がりけり

子等の顔見では癒ゆるや梅雨の朝  
桃を持って京より来る子のありて

蓮の花生まれ変はりし顔で見よ

万緑の山野ゆたかや魁夷の青

夏祓妻の全癒をねもころに

風知草然もなき風に応へけり

透きとほる少女の恋や朴の花

埼玉 大谷満智子

初恋の色に鳴るなりうみほほづき

「考える葦」なり黙せ行々子  
近道や足にからまる梅雨穂草

われここに泰山木は天の花

夕暮の窓辺に置くや蛸草

山滴る久遠の時を蔵しつ

オペラグラス役者涼しき舞姿

杖となる母似の妹と豆ごはん

千葉 廣瀬 克子

寄りそうて目高育てる団地住み

茄子漬や備前の鉢に紺光る

梅雨の窓開ければ幹の頼もしや

京の夜の品書にある鱧おとし  
片栗の花咲く丘に建つ墓標

「二世紀生ぎよ」とビール酌む子かな

広島 川崎 雅子

故郷訪ひ来し娘の顔や夕涼し

ひとり身の気ままな暮し水中花  
ひねもすを讀書三味梅雨深し

故郷は懐かしきものも帰省

竹皮を脱ぐ音しきり外厨

千葉 東木 洋子

福井 西本 花音

広島 浅田セツ子

